

語り部ニュース

発行 NPO法人舞鶴・引揚語りの会

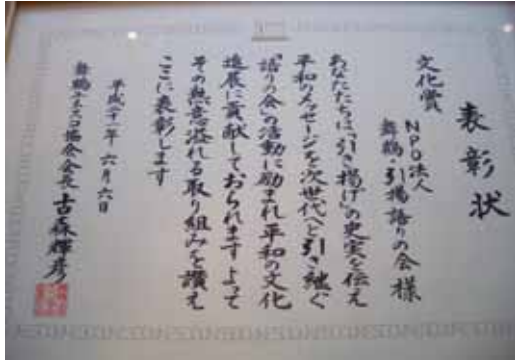
2009年6月号

住所 〒623-0133 舞鶴市字平舞鶴引揚記念館内

TEL 0773-68-0568

舞鶴ユネスコ協会より 当会表彰受ける

舞鶴ユネスコ協会では一九八五年から教育、文化、体育の振興に業績をあげられた個人、団体に對し、その功績をたたえ顕彰してまいりました。二〇〇九年度第二四回舞鶴ユネスコ協会賞の受賞候補として舞鶴市教育委員会教育長水谷昭様よりの推薦されており、本協会の選考委員会で慎重に



審議いたしました結果、文化賞の受賞者として表彰する事に決定しました。

表賞式・六月六日(土)

P M 一時三十分~二時

於舞鶴西総合会館三階会議室

舞鶴一日研修無事終わる

古橋ふみ子

去る五月三十一日(日)は晴天に恵まれ、受講生も多数参加頂く中、午前十時に十六名で記念館を出発しました。今回の研修は引揚記念館で語り部をしていますと、他に舞鶴には良い所がありますか?という質問を良く受けます。紹介するにも自分が見て理解していないと紹介出来ません。その為にも舞鶴のいいところ三ヶ所を見学しました。赤煉瓦博物館・五老岳ふるふるファームと回りました。

皆様方も一度は足を運ばれた事があるとおもいますが、バスの中で、赤れんが館で、五老岳での説明付き研修は如何でしたでしょうか?



舞鶴のいいところの再発見につながりましたでしょうか。私達はいつも語り部をしています。しっかり聞いて下さる方、私語をしながらキョロキョロする方、逆に聞く態度の勉強もして頂いたのではないのでしょうか。海の青と煉瓦の赤と本当に舞鶴は美しい町で

す。もつともつと知ってほしい事が一杯の町です。それにも増して舞鶴には世界に発信できる引揚記念館があります。会員の皆様はそれぞれの想いがあつて語り部になられたと思います。小、中、高校の次の若い世代に自分の中で「どうしても伝えたい事」を常設展示の中におりませて語って下さい。それにしてもふるふるファームの昼食はおいしかったです。ネーグルメ付き研修大賛成! 又何時の日か皆様の前で舞鶴を案内出来る日を楽しみにしています。ありがとうございました。



こんな事がありました。吉田

新型インフルエンザの水際作戦を横目に 定額給付金のお陰か 高速道路の割引のお陰か 良いお天気に恵まれた連休の引き揚げ記念館は 家族ずれのお客様で賑わいました。

日頃は余り目にしない青森、岩手などの東北地方や 九州のナンバー等他府県の車も目立つ駐車場は満車状態でした。

沢山のお客さんの中で三波晴夫さんのファンだと言う一組のご夫婦が 声を掛けて下さいました。特にご主人は三波さんの大ファンで 三波さんの唄を歌って老人ホームの慰問を続けて居られるとか・・・

「二〇年前の舞鶴での記念館建設の為のチャリテーションにも来た 菖蒲のこの着物 懐かしいナ」と三波さんの思い出にشتって居られました。赤い浪曲師

と言われていた三波さん私は、抑留のことは聞いたことは無かったが 晩年はポツリポツリ話されていたとか 戦友の原田さんの話と合わせ、華々しい歌手三波さんの 抑留者としての一面を見たような気がしました。帰りに三波さんの辞世の句を教えてくださいました。

「行く空に 桜の花が あればよし」心より ご冥福をお祈りします。

作文のすすめ(森下)

会社勤めをしていたので何かと書くことが多かった。字が下手で人様に見せる文章は特にづらい。理科系の人には字の下手な人が多い、それも半端でない人が。緊張すると字に性格が現れる。字が綺麗で筆の立つ人が羨ましかった。そこで一念発起作文に励む。目標は新聞の投稿欄に掲載してもらうこと。400字の文章を書

くのたつぷり一時間ほど、推敲にまた一時間以上。数日後また推敲を重ね、やっと投稿、2日後新聞社から電話有り。掲載したいかどうかと、勿論そのつもりで投稿したので依存などあろうはずが無い。一、二箇所の変更のアドバイス有り。快諾して掲載決定。掲載されると3000円の薄謝有り。これに味を占めて連続投稿すれども再度の掲載はない。購読紙が変わってまた投稿した、やはり一発目で掲載決定。同様に3000円の薄謝を得た。両新聞とも幾度と無く投稿しているのだが、未だ再度の掲載はない。今では400字程の文章なら10数分程でかけるようになった。これも継続の賜か。パソコンで書くため字の下手なのも気にならない、よき時代ではある。会報に掲載されたら3000円の薄謝が頂けるともつといいのだが。

＊連絡事項

二十一年度の総会資料に同封されていました名簿作成の為の郵便番号、住所、氏名、電話、ファックスの用紙を未だ提出されていない方、至急、記念館内語りの会までお送り下さい。又会費の未だの方も振込みお願い致します。

＊お知らせ(古橋)

前々回の企画展示、軍医 平出節雄氏の二男の堀米仁志氏がつくば市より来館され(やはり大学教授でお医者さんでした)お父さんを偲ばれて感激され、企画展をして頂いた事を感謝されていました。豊田さんご苦勞様でした。

5月の活動実績

稼働日数・31日
ガイド数・3,108人
予約数・22件
予約人数・736人
稼働会員数・20人
募金箱・76,065円

会員各位へお知らせ

平成二十二年六月十一日

事務局 谷口栄一

「養成講座」及び「史実研修会」の講師および参加のお願い
標記につきましては別紙カリキュラムを6月度理事連絡会で承認をいただきましたので
お忙しいとは存じますが講師をお願い申し上げます。
なお、基本的な考え方は下記のとおりです。

記

一、養成講座

① 場所・日時

引揚記念館で毎月第四土曜日
十五：00～十七：00

② 引揚記念館の各コーナーの前で養成講座受講生を対象に説明。

③ 時間は2時間とっておりますが特にこだわりません。

④ 内容はお任せいたします。
たとえば、三〇分講師が説明、

三十分質疑応答、その後受講生に語り部の実践をしてもらうといった方法でもけっこうです。
⑤ 会員の方も参加ください。

二、史実研修会

① 場所・日時

商工観光センターで毎月第二日曜日 十八：00～二十：00

② テーマを基本的に講師の自由な発想による内容でけっこうです。

③ 時間は二時間とっておりますが特にこだわりません。

④ 対象者は会員・養成講座受講生です。

三、その他

① 六月十四日の研修会は東体育館「多目的ルーム1」です。

② 予定が変更された場合は都度連絡いたします。

以上

わいわいと集まりませんか

会員相互のコミュニケーションを図るため引揚記念館横にある全国友の会の事務所内を整理していただきました。テーブル・イスもあります。随時ご利用ください。（十人程収容可）また、毎月第四土曜日・午後は皆で「語ろう会」をオープンします。六月二七日は一泊研修旅行について語ろうではありませんか。旅行大好きな方も、嫌いな方も是非ご参集ください

「兵卒のシベリア捕虜記

著者・門間祐太郎

編集・南澤 武

昭和二十年（一九四五）五月から二十二年七月まで（二回目）

そこで「番速い列車で新京に戻りました。当時私は新京支店長兼工事部部长を兼務していましたので、新京支店に着くとすぐに事務

主任と事務の引継ぎ、得意先や、下請けへの連絡、新京周辺在住の友人知己へ挨拶、明早朝六時から私と一緒に入営する数名の社員、の壮行会の準備に追われました。
「教育召集に行くという名目で内密でやれ」という軍の強いお達しを守りつつも、家内と二人きりになったのは夜中の三時頃でした。兼ねて用意しておいた軍の奉公袋（といえば聞こえは如何にも良いのですが、実はこの袋は、中に遺言状と髪の毛が収めてあつて、戦死したら、遺族に届けられるはずのものなのです）を、私は未だ書き足すこともあるだろうと、密封しませんでした。
それを前夜来の疲れで枕元に置いたまま、まどろんでしまったので、家内に遺言状を全部読まれてしまいました。
三ヶ月間の教育召集に入営するのだといっても、独逸の壊滅は目

前だよ、ソ連といざこざが起これば、勿論生きては帰れない・・・と妻に言い残して警察署の通用門をくぐったのです。

直ぐにソ満国境近くの間頭（かんとう）の兵舎に詰め込まれました。軍隊における階級を示す襟章は、べた赤の「輜重卒が兵隊ならば、蟬や蜻蛉は皆なんとやら」と多分に新兵さんを憐れんで、その頃よく歌われていたその輜重二等兵になりました。

新兵になったとたんに「俺は六年兵だぞ」と言う古参兵殿から「学校出だなんてぬかして、ふんどりかえるな！」とそれまで劇や、映画よ、小説などで知っていた以上の、しごきに遭いました。僅か三ヶ年の兵役を、このようなしごきに耐え切れないで自殺したり、また脱走した哀れな、やっと二十歳になったばかりの新兵さんの苦しみが胸の底までしみこんで来

ました。

馬など恐ろしくて一度も触ったこともなかった私が、どうやら手綱を握って歩き出すと、馬は私を馬鹿にして、私の足の甲を踏んづけたり、前に行く馬と一寸距離が空くと、文字通り道草を食って進まなくなったり、蹄鉄掃除をしてやろうとすれば蹴っ飛ばされるなど、散々な目にあいました。

対戦車戦闘訓練の時、模擬破甲爆雷を背負い、対向戦車の真下に飛び込もうとして足を滑らし、戦車のキャタピラーの下敷きになり損なうこともありました。

この他、色々骨身を削る、命的の訓練を受けましたが、ちょうど三カ月が過ぎた昭和二十年八月十三日の夕方、「間頭方面にソ連軍が侵攻してきたから応戦する。即刻出撃！各隊前へ！」の命令が出ました。

その時の我が小隊の装備といっ

たら、三八式小銃二丁、牛蒡剣一丁、手榴弾が一人に二個づつ、その中の一個は自決用でした。

敵に出会ったら一撃即死です。屠所に追立てられる牛や馬や豚や羊の群れと同じ境遇です。只、死あるのみ！（降伏後野営地の倉庫には、油で保護された未使用の小銃の梱包が完封されたまま山ほども隠されていた事を後で知りました。）

出撃命令が出たとき、私は担当していた馬に膝頭の内側を蹴られて歩行が困難だったため一応整列はしましたが、命令で宿営地に居残る事になりました。私が留守番に残されたのは、第一二八師団、歩兵第二八一連隊、六四六部隊本部付だったと記憶しています。昔から言い伝えの通り、“軍隊は軍隊かも！”

予定宿営地を設営後間もなく、部隊本部の指揮所を造るのだとい

うことで、私は会社勤めの時の職歴を買われて数人の満人労務者を指揮して、付近の小高い丘の上に、地下壕を掘削して造る事になりました。

一般兵士の職務を離れて、見習い士官殿と古参上等兵の二人が直接私を指揮することになったので、急にのびのびした気分になりました。

然し工具は一切無しの仕事なので、空になった一升瓶に水を張って測量器具の代用にしたり、丸鍋を尖らせて堅い岩盤を掘ったり、作業は苦勞づくめでした。

次回は抑留、厳寒のシベリアへ

投稿をお願いします。

手紙は事務所卓上へ谷口久さん宛、FAXは豊田宛にお投稿に薄謝なしです。）